エミ 作=gembu

害男子狩り~オフィス街の闇で

女は会社の残業の帰り、オフィスのあるビルを出て、真夜中のビル街の隙間に女が1人追こまれていた。 ものの5分も歩かないところで、この路

地に引っぱりこまれてしまったのだ。

追つめた男は2人。

身長は、だいたい165に170と言ったところだろう。どちらも筋肉質で、その股間同様、

薄いTシャツの胸は筋肉でもりあがっている。

白のTシャツにグレーのトレーニングパンツをはいた背の低いほうが、シンヤ。

黒のTシャツと黒い短パンをはいた背の高いほうが、ケン。

実は、2人ともこの近くにある、スポーツジムのインストラクターで水泳を教えているのだが、

ともに生徒に手をだしては問題をおこしていた。

しかし、 人気があるのは事実で、会社のほうでも首にできずにいるのであった。

「おとなしくしなよ。楽しませてやるからさ」

が相手してやろうってんだから」 「そうだぜ、俺らに抱かれたいって女は腐るほどいるんだ。アンタ、 運がいいんだぜ、

「うぬぼれんじゃないわよ!」

襲いかかろうとしていた2人は別の女の声にふりむいた。

するとそこには、全身、黒いピチピチのレザースーツに黒い覆面をした子柄な女がたっていた。

「なんだ、こいつ」

シンヤがケンの方を見ると、ケンはニヤリと笑うと、

「なでもないさ、これで2対2になったってだけの事だろ」

「そうだな」

とシンヤも歯を見せて笑う。

その瞬間、 黒い女の蹴りがケンの顔面を横から薙はらいケンはふっとんだ。

「このアマ!!」

引かれて倒れてきたシンヤの股間にいきよいよく、 シンヤがパンチをはなつが、女はその手をつかむと巴投げのようにそのまま尻からたおれると、 レザーブーツの爪先を突き刺し、 そのまま捻

りをくわえながら足を蹴り上げ投げ飛ばした。

たが、 リッ!」と言う自分のキンタマが踏みにじられた音を聞き、投げとばされた衝撃で気を喪いかけ 投げ飛ばされる瞬間シンヤは頭の中で、「ドゥッ!」と言う爪先が股間に喰こむ音と「ゴリ 後から追かけてきた男にかわからない激痛に股間を押さえてのたうちまわった。

女は、怒りに燃え、立あがったケンの方にむきなおった。

ケンが構える。

ボクシングの構えだ。今は水泳のインストラクターをやっているが、 高校、 大学とボクシング

- 4 -

をやっていたのだ。

だが、女はそんなケンのパンチをみごとによけていた。

「そ、そんなバカな!」

ケンは、あせった。自分の体と、ケンカには自信のあった自分のパンチが1つも女には当らな

Δ.

そうこうする内に、ケンは汗だくになり、パンチも大振になってきた。

彼の日に焼けた肌が汗で光っている。

·??!!!

ケンの視開から女が消えた。

女は彼のスキをついて背後にまわりこんだのだ。

「あうつ?!」

入し、まさぐった。 女は、ケンの黒い短パンの右裾から彼の股間に手を突っこみ、白いビキニパンツの中にまで侵

た、二つのキンタマを、2個とも右手でしっかりと握り締ると引っぱりだした。 そして、常にケンの競泳用の赤いパンツみごとに脹らませ、ジムに来る女達の視線を集めてい

「ううつ!」

べがない。 ケンは呻き声をあげた。 男の急所であるキンタマを握られては、 11 かに相手が女と言えなすす

さっきまで犯そうとしていた女が、黒ずくめの女の手に無理やり短パンの裾から引っぱりださ 揉み上げられている、 彼のキンタマを凝視していた。

黒ずくめの女がケンのキンタマを握っている手を、 まるでキンタマを揉ぎ取る様に捻った。

「あぁぁ・・つうつ・・くう・・」

おもわずケンの口から憐れな声がもれる。

黒ずくめの女は、 もっとに良くみせてやろうとしたのか、 彼のキンタマを更に彼女の方へ引っ

ぱりながら言った。

マは、 女の手で。それから、あっちの男も男をやめさせる。 マをぶらさげている資格なんてないものね。素敵だと思わない?男が男でなくなるのよ。しかも 「これが、男の急所、 あなたに潰させてあげましょうか?」 キンタマよ。これから、この男のキンタマを潰すわ。こんなクズにキンタ もし、 お望みならば、 向こうの奴のキンタ

女はギラギラと光る目で力強くうなずいた。

「ふふ、じゃぁまず私からね。」

と言うと、タマを握る手に力をこめた。

「じょっ 冗談じゃねぇ! よせ! やっ やめろ!!」

った。 ケンは、 男でなくされると言う恐怖で、 必死に抵攻するが、キンタマを握られた彼は無力であ

「やめろ!やめてくれぇ!!」

女は親指と人差し指で袋の根本をしめ、 キンタマの逃げ場を無くし、 ジワジワと手に力をこめ

「うぅつ! ぐつ! くつ! くうぅぅぅ・・・!!

歯がおれるほど喰しばるケンの顔からは玉の様な汗が吹きだし顔色は真っ青であった。

- 5 -

しだいに強まる女の手の中で、彼のキンタマ水風船の様にパンパンになり、限界に達していた。

ぐちょっ!」

生に終りを告げ、 肉の潰れる音がした。ケンは、最後の精液を大量にブチまけながら、 その場に崩れ落た。 泡を吹き、 男としての人

そして、シンヤもまた、男を廃業させられようとしていた。

られ、自分が犯そうとした女に両足をとられ、 彼は裸に剥かれ、その筋肉で覆われた肉体とその男の証明を曝し、両手は黒ずくめの女に抑え 電気アンマをかけられていた。

悲鳴を上げている。 常に彼の自慢であった大きなキンタマが今、 女の足にゴリゴリと踏み滲じられ、 逃げ場もなく

ぐおおつ!!きつ キンタマが お 0 俺の金玉がぁ う !

鍛え上げた彼の筋肉もキンタマを攻められる地獄の苦しみの中では、 まったく役にたたず、 ケ

イレンのようにピクピクとしか動かない。

彼は、 日に焼けたシンヤの肌と筋肉が、自分の流した汗で油をぬったようにヌラヌラと光る。 キンタマを摺り潰される男ゆえの痛みと苦しみの中、男に生まれたことを後悔した。

「さぁ!そろそろ潰れるわよ!」

「いくわ!!」

「ぐがあああああつ!!!」

そして、 シンヤの男の象調であるキンタマも、 残る全ての精液を吐きだしなからその袋の中

- 8 -

踏み潰され、憐れなただの肉塊となった。

2 誕生

が、 体を持っていた。ボディビルダーの様に、ただ筋肉を発達させたのではなく、戦いの中で鍛え上 エミは今、リングの上にいた。リングの上、ほぼ中央で男と向かい合っていた。男は見事な肉 防具としての脂肪をうっすらとのせた格闘家の身体だ。しかし、それ以上に人の目を引くの 硬派な肉体の割に、派手好きな彼の趣味なのか、 眩しいぐらいの蛍光オレンジのパンツを丸

- 7 -

にその存在を誇示している。

ンツの中、太く、そして良く日焼けした彼の太ももの付け根に、まさに男の象徴と言わんばかり 々と実らせている彼の睾丸だった。プロレスラーが良く身につけるぴっちりとした化学繊維

分の道場生の中で、もっとも強い中田と結婚させる事に勝手に決めた。 る男の子を授からなかった事、 女には無理だと彼女に教える事も、道場に立ち入ることさえも拒んだのだ。そして、 「一途な思い」と勘違いし、 彼女の家は代々受け継がれてきた空手道場であったが、 中田は急速に彼女に接近する事になる。 受け取ってしまったのだ。 そして、 生来の自分勝手さも手伝って、 そして、 そんな裏事情を知らなかった彼女はそれを 彼女自身は、 彼女の父親の後押しを受 娘の意思も聞かずに、自 空手を知らない。 跡取りであ

最初の内はうまくいっていた。 彼女は厳つい父親の遺伝子はどこへやら、 母親にそっくりで美

飽きた」と彼女を切り捨て、 父親との取引のことをばらした上、「たとえ道場とワンセットでも、 "Power Bash" 国大会で優勝した中田にあるプロレス団体から派生し、世界的にも有名になった総合格闘技団体 しく、何より「道場の跡取り」は中田にとって悪い話ではない。だが、もともと派手好きな中田 美しい外見の割には地味な性格の彼女に嫌気を覚え始めていた。さらに悪いことに空手の全 から声がかかったのだ。派手好きな彼はすぐに食い付いた。そして、 道場にも理由を言わずに消えた。 お前にはウンザリだ。 彼女に彼女の

テレビでも彼の誇らしげなインタビューを見ることができたからだ。 た。ブラウン官の向こうで、 てやろうと誓ったのだ。 彼女達が失踪の理由を知るのに数日とかからなかった。「大型新人入団」のタイトルで、 いかにも調子のよさそうな笑顔を振り撒いている彼から全てを奪っ その時、彼女は復讐を誓っ

- 10 -

自分の父親の仕打ちと悔しさに彼女は泣いた。泣きじゃくる娘に気付き、母親が慌てて駆け寄り、 を殴り飛ばすと「稽古の時間だ」と、さっさと部屋を出ていってしまった。殴られたショックと 頑として突っぱねる父親に中田に聞いた取引の話しを叩き付けた。だが、父親は逆ギレして彼女 頂天になっている奴を2度と立ち上がれないほどに叩きのめす事こそ、奴に対する最大の復讐だ。 復讐のため父親に空手を教えてくれと頼んだ。 中田よりも強くなる。 期待の新人と騒がれ、

声をかけた。事情を聞いた母親は、夫の娘に対するあまりの仕打ちとその身勝手さに声を失った。 「なんて事を・・・」

娘の手を取り、 娘の痛みと傷を感じた母親は、涙を浮かべた目で娘を見つめ言った。

[ H W/ まず部屋に戻ってゆっくりと休みなさい。そして、 今夜2時に道場へ来なさい、 11 わ

と聞こうとしたが母親の瞳に宿った強い決心の光にエミは素直に従うことにした。

母がいた。 深夜、生まれて初めて彼女は道場に足を踏み入れた。 そして、そこには始めてみる黒い道衣姿

に天誅を与える黒女となるのです」 踏み入れたからには、もう後には戻れません。あなたは、この家の後継ぎとして、 「エミ、これからあなたに、この道場に受け継がれてきた技を伝授します。ここにいったん足を おろかな男達

「くろ・・・め・・?」

きっと神様が私達黒女を加護してくださってるのね」 きました。今は私が、そして次はあなたの番。この家では、 「そう、黒い女、 と書いてくろめ。我が家では代々、思い上がった男達に黒女として罰を与えて 昔から子供は女しか生まれないの、

「女だけって事は・・お父さんは・・?」

「もちろん入り婿よ、誰も知らないでしょうけど」

に空手を偉そうに教えているの。 「そうそう、これはお父さんにはまだ内緒よ、黒女はこの家の女だけの秘密。 黒女が交代するまではね」 男はなにも知らず

「・・・交代するまで?」

ばならない 「そのうち分かるわ。今は1分でも惜しい。 の。さあ,始めましょう」 エミの覚悟も意見も聞かない。 あなたはやらなけ ħ

とは無く、何時の間にか、 なりの音を立てることもあったが道場は完全に防音になっているため父親が深夜に目を覚ますこ 女を支えていたし、厳しい稽古はかえって彼女の傷の痛みを忘れさせた。一年間の修行の中でか その日から毎晩、 エミと母親の修行の日々が始まった。 一年が過ぎようとしていた。 かなりハードでは あったが復讐心が彼

「どういうことだ?」

ないか。しかも、 らずに白いビキニパンツ一丁で道場につれてこられて見れば、黒い道衣を着た彼の娘がいるでは な声で聞いた 一度もない。 その声には怒りが含まれていた。彼がエミや彼の妻に、道場へ立ち入ることを許可した事など 常に「入るな」と命じてきた。それにも関わらず、深夜に妻に起こされ、訳もわか よく見れば妻までが、 同じ格好をしている。 彼はもう一度、 さっきよりも大き

[どういうことだ!]

すると妻が答えた。

ったでしょ。 道場を次がせるためと、次の世代の黒女に修行の集大成として、父親と戦わせるためなの。 「黒女の交代式よ。我が家では代々強い男を婿に迎えてきた。それは、隠れ蓑として開いている エミが次の黒女になるために、今ここで、 あなたと戦うのよ」 分か

「なっ、何を訳の分からない事を言ってるんだ!」

「あら、分からなかった? あなたって本当に馬鹿ね」

「何だと!」お前は、いつから俺にそんな口を聞くようになった!!」

厳つい顔が怒りで真っ 赤に上気している。

「ちょっと!お父さんの相手は私よっ!!」

エミが一歩前に出た。

「なにおお~!! よ~しっ! そこまで言うのなら相手をしてやろう! だが、 娘だからと言

って手加減はせんぞ!」

そう言うなり、 鬼のような正拳を娘の鼻をめがけて放つ。 が、 すでに娘はそこにはい

「グゥッ」

の下をくぐり父親の股間に軽く正拳を当てたのだ。 尻を後ろへ突き出す様に腰を引き、そのずっしりとした、 股間に手を当てた。 娘が腕

「おのれ、俺の、俺のキンタマを・・」

がさし、厚みが増した。 中途半端なダメージが、 かえって怒りをあおったようだ。 父親は身構えた。 身体中の筋肉に朱

「本気だわ・・・」

「シュッ!」

さで、軽くかわすと、 ンスを崩した父親は、 鋭い呼吸と共に、 いかにも重そうな蹴りが飛んできた。だが、彼女は信じられないような素早 ズシンッと言う音を立て、大股を開いたまま背中から落ちた。 父親が蹴った右足を戻す前に、左足を内側から凪ぐように蹴り払う。バラ

られた。 息が詰まる。 だが間髪いれず、 大股を開いた彼の無防備な股間に娘の足の裏が叩き付

「ぐはぁっ!!」

左手で股間を押さえながらも、 てやらなければならない。 男にしか分からない痛みに、彼は残っていた肺の空気をすべて吐き出してしまった。咳き込み、 彼の怒りは頂点に達していた。男として、父親として、夫として、この女どもに制裁を加え 彼は猛然と突っ込んだ。 何とか立ち上がった彼の目に、ニヤニヤと笑っている娘と妻が映 しかし、またしても彼は、 自分の娘を捕らえ

る事は出来なかった。

げられている為に、彼は自然と上半身を折り、頭を下げ、尻を突き出すような格好になってしま しているではないか。 った。太い首を捻り後ろを見れば、 背後から両腕を手首の所で取られ、 娘が勝ち誇ったように、 後方へ捻り上げられた。 彼の腕を高々と持ち上げ彼を見下ろ 背中から上へと腕を捻り上

「なめるな~っ!!」

力づくで振り解こうと、両足を踏ん張った瞬間、娘の膝が彼の股間に背後から突き刺さった。 「ぐはっ!」 娘の力などたかが知れている。 スピー ドでは劣るかもしれないが、 力勝負で負ける訳が無い

も出来ないのだ。 すか、そうでなければ、相手の側に行ってしまう。 これだけ上半身を前に倒したら、たとえ、仮に足を閉じたとしても、 撃が出来ない、防御も出来ない。 彼はようやく自分が男として、 男の最大の急所であるキンタマを無防備に相手に晒してい かなり危険な状態である事に気付いた。まず、この状態では反 しかも, 相手が放してくれるまで倒れること キンタマを自分の内腿で潰 る。

「さぁ、いくわよお父さん。覚悟はいい?」

ちょっ、ま、待ってくれ! エミ!」

「やっ、やめてくれ~っ!!」「もう遅い!!」

「でえいやっー!!」

ドスドスドスドスドスドス・・・。

「グオオオオオ・・・」

床に叩き付けられて潰れ、反動でまた、 な瞳は充血し、 には、もう声を上げることも出来なかった。口の端からは涎が垂れ、焦点の合わなくなった虚ろ イドもまったく役に立たない。むしろ、男ゆえの地獄であった。何十発目かの膝蹴りを受けた頃 父親の叫びも空しく、娘は自分の膝を父親の股間に何度も何度も叩きつけた。男の意地もプラ 涙が流れ鼻水と混じる。 もとの丸い形に跳ね戻る、軟式テニスのゴムボールに似 蹴られ続けている白いビキニパンツの股間は、まるで、

「ふうつ」

が急に情け 懸けて培って来た筋肉も、男の意地も力も、 親はうつ伏せで床に倒た。 百発以上蹴っただろうか、 ない生き物に見えて生きた。 泡を吹いている。 彼女は漸く父親を放した。 あの強く逞しい父親が惨めな姿で倒れている。長年 睾丸を責められると是ほど脆い物なのか。 さすがにエミの額に汗が滲んでいる。 エミは男

一潰れたのかしら?」

母親の声に答えるようにエミは父親を仰向けにして股間に触れてみた。 コロッとした物が二つ

于に触れた。

「まだ潰れてないみたいよ」

「そう、それはよかったわ。あなたにどれぐらいの力で潰れるものなのか、覚えてもらわない

「潰しちゃうの?」

「いやかしら?」

「ううん、やらして!」

「それじゃぁ、早速やって見ましょう。 どれぐらいの握力で潰れるのかキチンと覚えなさい。

しろ、2個しかないんだから」

「両方潰していいの?」

「だめよ、私だってまだ若いんだから・・・ね」

ヤダーお母さんたら!」

「ふふっ。さあ、やっちゃいましょう!」

母親は無様な格好で床に横たっている夫の唯一、 身に着けていた物を脱がした。

ゴロンとした見事な睾丸が露になった。

「は~い!」

少し小さい方の睾丸を選んだ。それは、暖かく、硬い弾力があり不思議な感触だった。 少しおどけながら、エミは父親の、まさに「男の証」を手に取った。彼女は母親のために、

「うううつ・・・」

父親が目を覚ましたようだ。 すかさず、 母親は夫の両肩にそれぞれの足を乗せ、 踏んだ。

「なっ、何をっ!」

睾丸からの耐え難い鈍痛に支配されている父親は、普段の半分の力を出すことも出きない。

体重をかけている妻を跳ね飛ばすことなど出来ようはずがなかった。

「お父さんの左のキンタマ私がもらうね。私にひどいことした罰よ」

「まっ、まってくれエミ! 俺が悪かった! まさか、 中田が裏切るとは思わなか 0 たんだ!

それに、俺はお前の幸せをねがって・・・」

「うるさーいっ!! いいわけなんて、聞きたくない。 黙ってキンタマ潰されなさいっ

「よっ、よせ! **ガバ!** キンタマだけは勘弁してくれぇ! たのむっ! キンタマあああああ

あつ!!」

父親が喋り終わるのを待たずにエミは父親の睾丸を握っている手に力を込めた。

「ぬおおおおおつ!!」

「まだ、潰れない、結構、丈夫なのね」

さらに力を込める。

「きっ、キンタマがあああっっ!!」

男根が破裂しそうなほどの青筋を立て、 父親の全身からは玉のような汗が噴出し、顔は真っ赤で、こめかみには、血管がうきでている。 天を突き始めた。

「たっ、たのむっ、キン、 タマ・・・、だけは・・・、キンタマ・ だけは・ ・・カンベン

•

父親は裏返った高い声で、咽喉から搾り出すように娘に懇願した。

どこへいちゃったの?」 「あはは! どうしたの、そのなッさけない高い声は? いつものおなかに響くような低い 声は

てを握った掌に込めると、 十数分が経過しただろうか、疲れの見え出したエミが、これで最後とばかりに、 ついに、 耐えかねたように、 彼女の手の中で父親の睾丸は弾けた。 残った力の全

「ひぃっ!!」

と咽喉を鳴らし、父親は再び白目を剥き、気を失った。天を突い 糸を引いている。 ていた男根は白い 液を吐き出

握力をつけてもっと簡単に潰せるようにならないと」 「どうだったエミ? 今日は大分、 時間がかかっちゃたけど、 初めてだからしょうがないわね

「うん・・」

エミは濡れていた。中田に抱かれた時よりも、 強く、激しい快感がエミを包んでいる。

母親は、怪しく輝く娘の瞳を見て、全てを理解した。 「男の証」を潰した感触の残る自分の手をじっと見つめていると、 また快感が戻ってきそうだ。

「ふふっ、やっぱり私の子ね・・・」

に中田の睾丸を見ていた。 エミは父親の睾丸を潰したばかりの自分の手を怪しく輝く瞳で凝視してた。 次はあいつ・・・。 潰してやる・・・この手で・・ そして、 その向こう

る 闇より黒く

手なキャラ故に「ただのお調子者じゃないか」とか陰口を叩く奴もいたが、デビュー戦を見事な 看板となった。 ワンラウンド K.O で勝利を収め、 О е r Bashの若きホープとして華々しくデビューした中田は有頂天だった。その くだらない陰口を吹き飛し、 自他ともに認める Power Bash 0)

れて行く。 ともある。 毎晩、 練習の後には夜の町に繰り出し、 時には3人まとめて相手をしたり、いきつけの店のホステス全員と店の中でやったこ 中田はその風貌に似合わずあまり酒には強くなかった。 寄ってくる女達の中から好きな女を選んでホテル 一杯飲んだだけで、 真っ赤に へつ

なった。 無い。先輩の言われるまま、進められるままに、大して強くない酒をあおる。飲んでは吐き、 行くことになった。いかに注目される大型新人だとしても、 う命令であることを、中田は重々承知している。言われるままにジムの近くの居酒屋まで飲みに ないかと誘われた。体育会系の人間の場合、「行かないか」と聞いてはいるが、「行くぞ」と言 いてはまた飲まされ、彼にとっては練習より辛い飲み会も、 今日も練習を終えた中田が、 シャワーを浴びて出てくると先輩達に呼び止められ、 ようやく2時を回った所でお開きと 中田が新人であることに変わりはな 飲みに 行

「電車もねえし、今日はジムに泊まるか・・・」

先輩方が女を連れ込んでいるという話しだが、今日は大丈夫だろう。 るジムの扉を開け、 どういう理由かは知らないが、 中に入った。 ジムには更衣室の奥にベッドが措いてある部屋がある。 中田は完全防音になってい

アを閉め、 かぎを掛けた時、 なにやら人の気配を感じ振り向いた。 良く見ると闇の中に黒い

人影が立っているのが見える。中田は緊張した。

「誰だ?」

グの電気だったようだ。 中田は手探りで、入り口の横に3つある電気のスイッチの1つをつけた。どうやらそれはリン リング上の電気がリングと部屋の中を照らす。

「女・・・?」

そして白くすらりと伸びた足には膝下まである先の尖ったブーツ。ちょっと見には SM の女王様 のようなカッコをしている。 影の主は女だった。ぴっちりとした黒いレ ザーのジャンパーのような物と同じ材質のタンパン、

最初は先輩が連れ込んだ女かと思ったが、その顔には見覚えがあった。

手が女ならば誰であろうと大した問題ではない。恨み言の1つでも言いに来たのだろうが、 ちにして犯してやる。 つは不法侵入だ。非を問われるのは向こうのほうだ。たとえ、ナイフを持っていようとも返り討 どうやらそれは間違い無く、 中田は下半身に血が集中するのを感じた。 自分が捨てた女だ。相手が女だと知って中田の緊張は解けた。相 こい

「久しぶりじゃねえか。 俺が忘れられなくて、 抱かれに来たのか?幾らかはマシな女になったじ

やねえか、暗いのは、変わらねぇみたいだけどな」

「あなたは、全然変わらないみたいね。特に、そのお調子者ぶりと最低ぶりはね」

「ほうつ、 不法侵入者が言うじゃねぇか。警察にたたき出してやっても良いんだぜ」

を言いに来たわけじゃないの。あなたと試合をしに来たのよ。復讐のデスマッチをね」 「じゃァ、電話すれば? ジムに女がいるんですゥ~。助けてくださ~いって。私はね、 恨み言

「はぁ? 本気で言ってんのか? この俺様とデスマッチだぁ?」

ばっかり大きくて、脳みその小さな男になんか負けないわ。もっとも、 ら許してあげないことも無いけど?」 「もちろん、素手と素手でね。その為に、私は修行を積んできたのよ。 土下座して謝るんだった あなたみたいにキンタ 7

「はんっ、おもしれえ。後悔すんなよ。後で泣いても許してやんねぇぞ」

「その言葉、そっくりお返しするわ」

「よ~し、そこまで言うなら受けて立つぜ」

リングにあがろうとする中田にエミは言った。

「あら、試合だと言ったでしょ。 事務所で着替えさせてもらうから待っててね。 あなたもちゃ

と着替えてきなさい。ただし、逃げないでよね」

「オメエこそ逃げんなよ」

でう言って、中田は更衣室へ、エミは事務所へ消えた。

出しやすくするためだ。 ズを履き、 更衣室で着替えながら、頭の中はエミをどう犯すかで一杯だった。蛍光オレンジのリングシュ 同じ色のパンツを履いた。 サポ ーターもカップも着けないことにした。 自分の物を

「へっ、たっぷり犯してやるぜ・・」

そう言って薄いナイロン生地の上から自分の息子の位置を整えた。

はそのままだった。 リングの上にはもうすでにエミが待っていた。 黒い ザーの セパレ トをつけている。 ブー

「おおっ、そそるじゃねえか。 昔からそうなら、 愛人ぐらいにしておいてやってもよかったのに

「相変わらず、下半身で物を考えているのね。こっちからお断りよ」

「ふん、今に俺が忘れられないようにしてやるぜ」

かりでゴツイだけであったが、今はそれに加えて、防具としての脂肪が着いている。 「あの厚い胸にもう一度抱かれてみたい」 中田がリングに上がってきた。見事な体をしている。 美しいと言ってもい い。あの頃は筋肉ば

「ついに、待ちに待ったこの日が来たのね・・・」

## 「いい身体をしてやがる」

だ突っ込むだけだったが、今日は違う。 うにやる。 久しぶりに見るエミの身体を上から下まで舐めるように見た。 ジムが開くのは10時からだ。それまでは誰もこない。時間はたっぷりあるぜ。 嫌がろうが、泣こうが、 叫ぼうが、 あの頃はエミが嫌がるので、 今日は俺の好きなよ

分の知ったことではない。女が男にでかい口をきくとどういうことになるのか教えてやるつもり 中田は平手打ちを放った。 力の加減はしていない。 それで鼻が折れ様が、 歯が折 れようが、 自

ところが、 エミは軽くバックステップでかわし、 冷ややかな笑みを浮かべている。 さらに、

彼の視界を奪う。 瞬にして、吐息がかかるぐらいにまで、 エミの顔が近づいてきた。 白 い肌に濡れた瞳と赤 11

きょとんとしている中田の股間に膝蹴りが叩きこまれた。

「ぐっ・・・」

蹴りだ。中田は再び、身体を折った。 つま先ではなく、 を連続で3発。思わず中田は手を股間から離した。「潰すのはまだ早い」そう判断したエミは、 予想もしなかったエミの反撃だった。 エミは構わず、股間を守る彼の掌ごと鋭いブーツの先で蹴り上げる。 足の甲で中田の股間を蹴った。 中田は両手で股間を包む様に抑え、身体をくの字に折 それでも、 彼の身体が一瞬浮くほどの凄まじ 骨まで響くような蹴り

- 26 -

「はあうつ・・・ぐううう・・・つ」

は、そのままコーナーポストまで吹っ飛んだ。 で蹴りあげた。鼻血を飛び散らせながら、大きく後ろに仰け反る。大きく開いた中田の咽喉にブ が噴出している。 内股で股間を抑え、身体を折ったまま、 一瞬目の前が暗くなる。 ルで突き刺すような蹴りを放つ。最初の蹴りで大きく後ろへバランスを崩していた彼 短く刈り金髪に染めた髪も脂汗で濡れている。無防備な顔面をエミは渾身の力 中田は動けなかった。 酸素を絶たれた上、 酒で赤かった顔は真っ青 後頭部をポストに打ち

## 「うっ・・くっ・・・」

相手が女だという油断、 本能を鈍らせていた。 て体を支えた。意識が朦朧としている。 コーナーポストに寄り掛かり、両腕を左右に延びるトップロ そして、 頭の中が犯す事で一杯であるという事が、 もともと強くないアルコールをしたこま飲まされた事、 ープに引っ掛け、中田はかろうじ 彼の格闘家としての

「この女・・」

意識が再び戻るにつれ、腹のそこから怒りが湧き上がって来る。

「ぶっ壊してやる」

と、何時の間にか彼の両腕は黒い革のベルトでトップロープに固定されている。どうやら、自分 トはしっかりと固定されていて、どうにもならない。慌てる彼の顔面にエミのブーツがめり込ん が思っている以上に長い間朦朧としていたらしい。だが、気付いたときにはもう遅い。革のベル 女が自分を見下ろしていた。頭を2, 3度振り、立ちあがる。が、両腕が着いて来ない。 見る

「くはぁ」

中田の鼻は完全に折れたようだ。二発目が襲う。

バキッ!!

田の左の玉を突く。 今度は前歯が数本折れたらしい。3発目は大きく開かれた股間に向けられた。 そしてそのまま、小刻みに圧力をかけた。 右の È ルで中

省してるんだ。 「ぐああああつ! もうカンベンしてくれ。鼻も歯も折れちまったみたいだし、もういいだろう? ホンとに反 お前には悪かったって、 まっ、まて! 待ってくれ! いつも思ってたんだ。なっ、 オ、俺が悪かった! もう許してくれよ」 俺が悪かったよ!

中田は開放された両腕を交互にさすりながら立ち上がり、 意外なことに、エミは中田の頬に平手打ちを一発食らわすと、両腕からべ 血だらけの顔で笑顔を作った。 ルトを外してやった。

「サンキュー、エミ・・・な~んてなっ!!」

と言うが早いが、中田は再びエミに襲いかかった。

「やっぱり、馬鹿ね。あんたって・・」

光石火の蹴りを叩きこんだ。 エミはそう呟くと、 中田の攻撃をかわし見事な素早さで背後に回ると、 後から中田の股間に電

「ぐはっ!」

両手で股間を覆う中田。構わずつま先で蹴るエミ。

「学習能力のない奴・・・」

何発か目の蹴りで中田の右の掌の骨は折れてしまったようだ。

## 「いつてえええ!!!」

思わず、手を離した中 田のがら空きになった股間を、 また後からエミが蹴

#### ソツ・・・

左手だけを股間に当てて身体を折り、尻をエミの方に突き出した。

# 「あら、蹴って欲しいのかしら?」

に抱え、エミは中田の股間を膝蹴りで連打した。 せるかたちでよりかかった。 面から突っ込んだ。 ・っ腹めがけて後ろへ蹴り上げたが、逆に右足を取られてしまった。 突き出した中田の尻を思いっきり蹴飛ばすと、今度はさっきとは反対側のコー コ ーナー エミが後から近づくと、 ポストの頭にちょうど顎をぶつけた中田はコーナーポストに頭を乗 待ち構えていた様に中田は、右足をエミの 取った右足を膝の所で小脇 ナー -ポスト ~ 正

ドスッドスッドスッドスッドスッ・・・・・

キンタマがあぁぁぁ・・・!!」 「ぐおおおおおっ!!!や、 やめてくれーっ!! ぐおああああ・ ! ! お、 俺の、 俺の

だった。やがて中 彼の男の証を守ることが出来なくなってしまっていた。カップを着けなかったことを後悔したが 最初の内は残った左手で何とか自分のキンタマを守ろうとしたが、 田の左手もエミの膝蹴りの嵐に耐え切れずしびれて感覚が無くなってしまい、 そんな事 エミはお構 V なし

П を放した。中田に意識はすでになく、開放されると、 からは泡を吹いている。 数百発は蹴っただろうか。 中田がピクリともしなくなったのを見て、 もろくも膝から崩れ落ちた。 エミは膝蹴りをやめ、 白目を剥き、

「ふん、これで許すと思ったら大間違いよ」

彼の を踏みつけ、 痛めつけられたことで、中田のキンタマはさらに大きくなっていた。エミは中田の エミは意識のない中田を苦労して、リングの真中まで引きずってくると、 両手を手首の所で持った。まるで中田が万歳をしているようなカッコをさせ、 気合と共に中田の腕を捻りながら、 後に倒れた。 仰向けに転が 頭の方に立ち、 両足で彼の肩

### きやあああ!!」

中田が悲鳴を上げる。コキーン!と言う音を立て、中田の肩が外れた。

彼の誇りでもある二つの玉。油断していたとはいえ、女に叩きのめされたのだ。そして今、彼が もっとも恐れているのは、 血まみれで恐怖に引きつっていた。四肢は動かすことも出来ず、自慢の身体は脂汗でぬめってい も同様にして外す。もう、中田は大の字になったままどうすることも出来ない。顔ははれあがり 次にエミは暴れる中田の右足を掴み、あっさりと股関節を外してしまった。そして左の股関節 光オレンジのパンツも汗に濡れ透けている。そして、そこには彼の男である証があっ 彼が男でなくなるかもしれないと言う事。 彼の誇りであるキンタマを た。

永遠に失うかも知れない、しかも、かつて自分が捨て去った女にだ。

なアエミ。 十分だよな?俺、 ほら、 もうぼろぼろだし、 十分だよな?」

• • • • • •

エミは無言で中田を見下ろしている。 その眼の奥には激しい炎があった。

中田は生唾を飲み込んだ。

「ま、まさか・・つ、潰すのか? 俺の・・俺の き、 キンタマ・・・?」

タマの上に落とした。 エミは中田の股間に立つと彼の目を見つめたまま、 エミの膝の下でゴリっと言う音がした。 まるで崩れ落ちる様にその膝を中田のキン

「ぐおおおおっ!! きんたまがあぁ・・」

ら踏みにじる。 立ちあがりブーツの踵を中田のキンタマの上に押せ円を描く様に、 ゴリゴリとすり合わせなが

「あっああっく・・ぐううう・・・」

「はひぃっ!!」 次にエミは、キンタマを下から掬い上げるように蹴った。 ブルンと中田の キンタ マが揺 れる。

真っ直ぐに踏み落とす。 そして、今度は虫でも踏み潰すか いわえる、 ストンッピングだ。 のように、 高々と膝を上げ、 何十発も叩きこんで行く。 踵を勢い良くキンタ マめがけて

「ぐえっ! ぐがっ! ぐごっ! ぐうぅっ・・・・!!」

った。 まるで、それ自体に意思があるかのように、 打ち下ろされる度に、 中田のキンタマは逃げ場を求め、ゴリッ、 何とか男であろうとする為の必死の抵抗の様でもあ ゴリッっと右へ左へと動く。

グシャッ

「!!!つぎやああああつつ!! キッ、キンタマがああああつつ!!」

と血と鼻水でぐしゃぐしゃだ。 とうとう、 中田の左のキンタマがエミの 何十回目かの ストンピングで潰された。 中田 0) 顔は

「あら、もう潰れちゃったの?以外と根性ないのねぇ。 大きいからって硬いわけじゃない O

まあいいわ、そろそろ夜も明けるし、 残ったキンタマも潰しちゃいましょう」

されたら、俺は、 も聞くから!! 「かっかんべんしてくれぇ!どうか、一つだけは、一つだけは残しておいてくれぇ。 俺は男でなくなっちまう! 潰さないでくれぇっ!!」 頼む! 何でもするから! お前の言うこと何で 二つとも潰

中田の男の玉を露にした。見事に左のキンタマは潰れ肉片になっていた。 中田の頼みなどハナっから聞く気もないエミは、中田のパンツを脱がせ、 最後に一つ残された、

「父さんのより大きいわ・・・」

それは前に潰した実の父親の物より一回りほど大きかった。

「ふふ、潰れちゃえばいっしょだけどね。潰しがいはあるわ」

ちゃうよお・・キンタマ 「頼む・・・頼むよお・ ・どうか、潰さないでくれぇ・・・俺のキンタマア・・男じゃなくなっ ・・キンタマ・・・」

々に力を込めて行く。 うわ言の様に呟く中田を無視して、エミは中田の最後のキンタマを手に取り、 楽しむように徐

俺のキンタマがああ! あああつ! あああああつ、ひいいいつ、つつ、潰れるううつ!!」 「うっ、うううっ、くっ、くはっ、 あひいい、 はううつ、 つつ、 潰れるうつ!! はつ、 はひぃぃつつ、キ、キンタマが!オ、 キンタマがああああ! キンタマぁ 俺の、

気に力を込めた。 そうやって、十分に中田を苦痛に喘がせてから、 両手で包み込む様にキンタマを持ちなおし、

ブチッ!!

「くひぃっ!キッ、キンタマ・・オッ俺の・・キン・・タマ・・・・・」

ズッシリとした重量級のキン

エミの手の中で中田のキンタマは完全に潰れ、彼が誇っていた、

となった中田の男の残骸が、彼がもう男でないことを示していた。 タマは、ペシャンコに潰れ空気の抜けたゴム風船のようになってぶら下がっている。 ただの皮袋

そして、朝の近い闇の中に闇より黒いエミの影が静かに去って行った。 中田は白目を剥いて泡を吹き、うわ言のように「キンタマ・・キンタマ・ • と呟いている。

翌日の新聞には、 中田が突然の引退発表をした事が大きく報道されていた。

ての後、彼の行方を知る物はない。

4 夏祭(番外篇)

ちくしょう!また負けた!」

人っ子一人いない裏通りに、荒れた男の声が響いた。

「今年で3連敗じゃねぇか! くそったれ!」

「まぁ、そうあれんなよ、ヒデちゃん」

ヒデちゃ 虫の居所が悪いときには、だれかれ構わず噛みつくのは昔からだ。 んと呼ばれた一番荒れている男が、英俊。 今年で30になる、 すし屋の板前だ。気が 角刈りにした頭を茶色

も鍛えているのか、真っ黒に日焼けした身体は筋肉が張り、見事な身体をしている。それをなだめているのが、幼馴染の、照也、この町の消防士だ。頭を短く刈り、さ

に染めている。

良く日焼けした肌に、

「でもよ、3連敗はまずいだろ。 来年も負けたらどうするよ?」

「おい、止せよ、シンジ」

坊で、実家の手伝いをしている 照也がなだめる側から、あおるような事を言っているのが、

の二人と比べると、色が白く、 3人とも、 丸坊主にした頭に捻った鉢巻を締めた真治も、 明るい青の半纏に白のふんどし姿だ。 3人の中では、一番背が低いのとで、 引き締まった良い身体をしているのだが、 やや見劣りしてしまう。

- 35 -

りの少ない裏路地をうろうろしているのは、この3人だけのようだ。 今日は年に一度の本祭りで、 町の人間は全て表通りの祭り会場へ出払ってい 普段か 人通

このあたりの町会はみんな御輿を持っていて、本祭りの日には、全ての町会から御輿が出され 3人の担ぐ2丁目の御輿は、 そして、 それぞれの御輿が出会うと、 今年で3丁目の御輿に3連敗を喫してしまい、こうしてふて腐れ お互いの御輿をぶつけあう、 喧嘩御輿になるのだ。

ているのだった。

「だいたい、なんでうちの町会は女にも御輿を担がせんだ?ほかの町会は男だけだってのによ」 と、ヒデが言えば、

「だから、うちは負けっぱなしなんだよ。 女になんか担がせるからだよ」

と、シンジがあわせ、

「まぁ、今は男女平等だしな、 そのうち他の町会でも、 女にも担がせる様になるさ、

5分と5分になるだろ」

が出せなくなんだよ」 大体、あの女どもが、キャー、だとか、いたーい、とか、ぬかと、テルが何とか収めようとする。この3人の関係は昔からだ。 ぬかしやがるから、 こっちの男は力

「あの3人さえいなけりゃ、 今年は勝てたかもしれねぇのにな」

「くそっ! あの3人、来年はぜってぇ出させねえ。出るとか言いやがったら、襲ってやんぜ」

「まあ、そう言うなって。それに、あの3人の内の一人は確か、空手かなんかの道場の娘だろ、

下手な事すりや、 親父にぶっころされるぞ」

「へっ、親父もろとも返り討ちにしてやるよ。・・ ん?

誰もいないと思っていた裏路地に、はしゃいだ女の声が聞こえてきた。

3人の前方、 5 60メー ル先の狭い十字路を半纏姿の3人の女が通り過ぎていった。

エミと幼馴染のサユリとノリコだ。

3人とも、 ふるまい酒の入った紙コップを持って、楽しそうに歩いている。

「やばっ!」

思わず、テルが呟いた。

あの3人こそが、今ちょうど、2丁目の御輿を3連敗させた原因と、 話していた連中だ。 頭に

血の上ったヒデが何をするかわからない。

の2人とは違い彼は公務員だ。 テルとて、喧嘩御輿に負けたのは悔しいし、あの3人のせいだとは内心、 ただでさえ、30 にもなって、結婚していないと言うだけで、昇 思ってはいるが、

進の道が狭くなっているのに、 暴力沙汰でも起こしたら、 間違い無く首になる。 別に昇進したい

わけではないが、首はまずい。

た。 この2人を何とか押さえなきゃ、 当然、シンジはヒデの後を追い、慌ててテルがその後を追った。 と思っている間に、 ヒデはもう3人の後を追い、 走り出して

いた。 テルが追いついた頃には、 ヒデー人だけだと思っていたのだろう、 もう話しはこじれまっくていて、ヒデと女達とで言い合いに 最初のうちは3人とも、 ギヤ ーギャ -と喚いてい

シンジに続いて彼が追いつき、でかい男達に囲まれた事で、3人のうち2人は次第に恐怖

の色を浮かべて結局は押し黙ってしまったが、一人だけは頑として引かない。

「確か、こいつが道場の娘だったな。エミ・・だったけか?」

自分達と同じ色の半纏をまとい、晒しを巻いた見事な胸を張って、 3人の男を前にして1歩も

引かない女に、 テルは、嫌悪感を感じていた。恐らく他の2人もそうだろう。

うずかせた。 逆に、その女の後ろで、 押し黙ってしまった2人の怯えた顔は、 男の支配欲を満たし、 股間を

・・・・ヤバイ、ヤバイ。そんな事よりヒデを押さえないと・・

我に返ったテルの耳にエミの声が響く。

「冗談じゃないわ! 負けたのが私達のせいだって言うの? 私達3人が入ったぐらいで、

- 38 -

るあんた達が情けないんでしょう! 人のせいにしないでよ!」

「なんだと、このアマッ!」

ヒデの顔は怒りで真っ赤だ。

「だいたい、 あんた達、そんなだから、 30にもなっ て、 結婚も出来ない んじゃない!」

「なんで、そんな事知ってんだよ!」

「あら、有名じゃない?2丁目の3バカって? 頭は悪いし、 乱暴だし、 根性どころかキンタマ

まで腐ってんじゃのいの?」

れには、テルも頭にきてしまった。

「いいかげんにしろよ、このアマ!」

押さえ役のいなくなった男達のボルテージは一気に頂点に達した。

「パッシーン!」

ヒデがとうとう手をだした。エミの頬を張ったのだ。

エミの手から酒の入ったコップが落ち、 つられる様に、 他の二人の手からもコップが落ちた。

[ 光 /// !]

「エミ! 大丈夫?」

頬を押さえ、 他の2人が泣きそうな顔で、殴られたエミの肩にしがみついた。しがみついた手が震えてい うつむき加減で黙ってしまったエミを見て、 3人の男達はちょっとした優越感に

浸っていた。

・・・ごめんなさい・・・」

エミが震える声で言った。

「へっ、始めから、そうやって素直ならよ・・・」

そういって、ヒデは、両手を自分の腰にあて、少し仰け反って見せた。

ていっちまうか・・・。ちょうど3対3だしな」

ほし

よくみりゃ、

かわいいじゃねえか、胸もなかなかだしよ、

このまま、

どっかつれ

らょっとした征服感に気を良くしていたヒデの股間に衝撃が走った。

・・・・なーんて言うわけ無いでしょう!」

隙だらけのヒデの股間をエミが蹴り上げたのだ。キュッと締められたふんどしの股間はタマ

位置が確認しやすい上に、逃げ場が無い。エミにとっては、たやすいターゲットだ。

白い足袋を着けただけのエミの足の甲は、正確に、ヒデの2つのタマを捉え、 ヒデのコリッとした、 タマの感触をエミは足の甲に感じた。 薄い生地を通し

「はううっ!」

仕留めたと思っ た、 獲物の思いもよらない反撃に、 彼は身体を丸め、 股間を押さえた。

の表情が、はっきりと脳裏に焼き付いている。 ミの足が当た ユリとノリコは、 った瞬間の、歪んだ男の股間が、 まるでスローモーションの様に、 そして、 彼女達の見た事も無いような、 エミが男の股間を蹴るのを見ていた。 男の苦悶

華奢なエミの、蹴り一発で、屈強そうな男が悶絶したのだ。

押さえて悶絶している男がいる。 っていると言う状態。その顔は、 2人にとっては、とても現実とは思えない光景だった。 屈強そうな男が、無様に身体を折り曲げたまま、 本当に苦しそうだ。 しか į 現に今、 目の前には、 かろうじて立 股間を

彼女達は体が熱くなるのを、 感じていた。

もちろん、 ショックを受けたのは、彼女達だけではない。

テルもシンジも、目の前の光景をとても信じる事が出来なかった。

だが、仲間がやられた、ということを感じた本能が二人を攻撃に向かわせた。

「この、くそ女!」

「てめぇ、よくもヒデちゃんを!」

テルとシンジは、ほぼ同時に、エミに掴みかかった。

[ 片 ※ ! . ]

「あぶない!」

ない」と思った瞬間、体が勝手に動いていたのだ。 サユリとノリコは自分で、自分の行動が信じられなかった。2人の男がエミに襲い掛かり、「危

の蹴りは、あっさりと、男達の股間にヒットした。 エミの様に、鋭くも無く、 どこかぎこちない蹴りだったが、 完全にノーマークだった、 彼女達

「ぐおぉっ!」

「ぐえっ!」

そろって前かがみになる男達。

足の甲に感じた、男のタマの感触。 搾り出すような男の喘ぎ声。 脳髄まで痺れるような高揚感

に2人はおぼれていた。

「ああ・・この感じ・・ うっとりとする彼女達を、 エミの声が現実に引き戻

この程度じゃ大したダメージにはならないわ!

11 V ?

とにかく、

私のまねをして!」

「だめよ、気を許ちや!

「うっうん!」

2人は同時に返事をした。

エミが素早く、ヒデの後ろに回り、彼の尻たぶに食い込んでいる、 ふんどしを握り締め、 力い

っぱい上に引っ張った。他の2人も真似をする。

「うおっ!」

「はうつ!」

「おあつ!」

と下腹に押し付けられ、 しに、締めつけられていた。男達の股間はまるで、布団圧縮機にでもかけられた様に、 男達が様ように声をあげる。 ギリギリと食い込んでいる。 女たちがふんどしを上に引っ張るので、 キンタマが自分のふんど ぴっちり

「なっ、なめんなよっ!」

引っ張られ、少しのびてしまったふんどしの隙間から、エミはヒデの尻の割れ目と、その向こう もうとする。だが、 に有るキンタマを裏側から見た。 ヒデがようやく、ふんどしを締め上げているエミの腕を掴んだ。 一瞬早くエミはしゃがみこみ、今度はふんどしを下のほうへと引っ張った。 残った手でもう一方の腕も掴

すばやく、右手をその隙間にさしこむと、 ちょうど掌ほどのヒデのキンタマを握った。

「つなっ! こ、こら! よせっ!」

自分でキンタマを引っ張る事になってしまう。 じかにタマを握られ、ヒデは焦った。何とかしようと、 もがいたが、 もがけば、 もがくほど、

ヒデにはなす術が無かった。その間にもエミは、容赦無くゴリゴリと、 タマを揉みしだいてい

「はつ、はうううううつ! はうつ、はひつ・・」

ていた。もう立っている事すら出来ない。膝をつき股間を両手で押さえるが、ふんどしの中で蠢 まるで、股間に火のついたような痛みと、胃の底から突き上げるような吐き気を、 ヒデは感じ

かった。 くエミの手をどうする事も出来ない。苦痛に歪んだ顔で天を仰ぎながら、 歯を食いしばるしかな

シンジは横目でヒデの様子を見ていた。

「ヤバイ、何とかしねえと・・」

手がシンジの白い尻の下を通り抜け、彼のキンタマを掴んだ。 タマを握られたら終わりだ、シンジは慌てて、股間を防御しようとしたが、 一瞬早くサユリの

「ぐああああつ!!」

全身から汗を噴出させ、シンジもまた膝を折った。 シンジも、男としての地獄に落ちた。ぐいぐいと女の手の中で自分のタマが押し潰されて行く。

の男の人生を握っている。そう思うだけで、イキそうだった。 は男の玉が入っている。男の証であり、男の最大の急所を自分は掴んでいるのだ。 サユリは、 目の前の白い男の尻を見つめたまま、下半身を熱くしていた。今、自分の掌の中に 自分が今、

目の前の男の白い肌に朱がさし、汗が噴出している。 筋肉が痙攣し、 痛みに耐えている

「その痛みを、私が与えてるんだわ・・・」

・ユリはこの男を、悶絶するこの男を、かわいい、と思った。

「ぐっ・・・くっ・・くうっ・・・ぐうううっ・・・

悶絶したことはある。だが、これほどの痛みは始めてだった。 き声を上げる事しか出来ない。テルの目からは涙がこぼれた。訓練の最中に何度か股間をぶつけ、 女相手に男としての力をまったく発揮できない。こんなか細い女に、無様にねじ伏せられ、呻 日々鍛えてきた筋肉が、何の役にも立たない。テルは苦悶と屈辱と恐怖の中にいた。

しかも女に与えられているのだ。男にしかわからない、内臓が捻れるような、 吐き気を催す痛

「くっくそっ! おっ俺のタマが、つっ潰れるうううつ・・・」

ルは両手を股間に当てたまま、 もやがて衰え、そして一生、玉無しと蔑まれのだ。だが、今の彼にはどうする事も出来ない。 潰されれば2度と戻せない。その時点で、 四つん這いで、顔を地面にこすり付け、 男としての全てが終わる事になる。鍛えてきた筋肉 必死に耐えていた。 テ

ら手を突っ込んだ、そして、 りそうな奴だったからだ。そのせいで、 ノリコは必死でエミのするのを真似ていた。なにしろ、 その手が、ころっとしたものに当たった瞬間、 少し強く握りすぎてしまった様だ。 自分の相手は3人の中でも一番力のあ 思いっきり握り締め エミを真似て、尻か

「ぐぎやああつ!!」

と叫んで、地面にひれ伏したまま、男は動く事も出来なくなってしまったらしい。

「なんだ、筋肉があるから、キンタマが強いってわけでもないのね・・・」

だり、少し引っ張ってみたり、といろいろ試してみた。その度に、筋肉男は情けない声を上げる。 「男なんて、威張っていても弱いのね。そんなに鍛えたって、女にも勝てないんだから」 そう感じたら、ノリコの気持ちに、余裕が出てきた。ただ、強く握り締めるだけ出なく、揉ん

ノリコは再び強く握った。

「あああっ! くっ、くううううつ!」

テルは悶絶した。

しばらくそうした後、男達が動かなくなったのを確認したエミは他の2人に声をかけた。

「さあ、もう話しても大丈夫よ」

我に返ったように、ノリコとサユリは男達の股間から手を抜いて立ちあがった。

「どうだった?」

「えっ・・なんだわからないけど、すごいい気分・・」

「わたしも・・すごい・・きもちいい・・」

2人とも夢を見ている様だ。

エミがうつ伏せに倒れている3人をひっくり返し、 潰れていないか確認する。 3人とも白目を

剥いて泡を吹いている。

「潰れちゃったの?」

「大丈夫、潰れてはないわ。ただ、腫れるでしょうけどね」

「潰しちや・・・だめ?」

「だめよ! そんなことしたら犯罪よ!」

実の所エミも潰してしまいたい衝動にかられていたのだが、今の彼女は黒女ではないし、 下手

をすれば、犯罪者になってしまう。そんな事をさせるわけには行かない。

「そう、そうよね」

2人とも残念そうだが、納得はしたようだ。

「でも、もう少しお仕置きは必要かもね。2度とこんな事をしない様にね」

エミの提案に2人は飛び上がって喜んだ。

「賛成!」

「意義な~し!」

「よし、じゃあ、誰か来る前にやっちゃいましょ」

そう言って彼女達は、 男達のふんどしを解き、そのふんどしで、 両手を後ろ手に縛った。

「じゃあ、まずこいつから!!」

そう言って、エミはシンジを指さした。

「О. K! まずは色白君からね」

エミがシンジの左腕を、ノリコが右腕を取り、 膝立ちをさせると、さらに、足を閉じられない

ように、シンジの内股に、足を入れた。

「じゃあ行くわね」

「気を失うまでよ。くれぐれも潰さないようにね」

エミが注意した。

「わかってるって。こんな奴のキンタマのために刑務所なんか入るのやだもん」

そう言って、 サユリはシンジの股間にぶら下がった2つしかないタマを蹴り上げた。

ピシャリ。肉を打つ音がした。

「ぐはぁっ!」

股間の痛みにシンジが目を覚ました。

「おっ、おいっ、何してんだよ、や、やめろ! やめてくれ!」

シンジは暴れたが、手を縛られている上、2人掛かりで押さえつけられているので振り解く事

が出来ない。シンジの目が怯えている。

怯えるシンジを無視して、 サユリは剥き出しのシンジのキンタマを蹴りつづける。

「はぐっ・・、おっ俺のっ・・ぐえっ、タッタマッ・・ぐはっ・・キン・・・

蹴られるたびに、肺から絞るような喘ぎ声がもれた。

「はひぃっ・・はひっ・・・!・・・潰・・・れ・・・る・・ やめっ・ ひぐううつ・・

やがて、シンジは再び、白目を剥いて気を失った。

「な〜んだ。もう終わりか」

「残念だけどね。さぁ、次はノリコの番ね」

「はーい!」

今度は、サユリとエミがテルを起こし、シンジと同様に押さえた。

「行くわよ。筋肉マンさん」

ノリコは鍛えられたテルの股間にぶら下がる。鍛える事の出来ない急所目掛けて蹴りを繰り出

ットするたびに大きなキンタマは逃げ場を求める様にブラブラと揺れ、 テルはその度に喘い

「ぐえええつつ ・キっキンタマがあああ・ ぐがあああ 0

地獄ような苦しみの中にいるにもかかわらず、 テルの男根が天をつき始めた。

「ヤダァ〜、こいつ、玉蹴られて感じてるよ〜」

「ほんとだ、変態じゃん。マゾだよこいつ」

「でも、蹴りやすくなったよね」

「でも、そのために大きくしたんじゃない? 変態だから」

「きゃー!」

なんと言われようとも、テルにはどうしようもなかった、 悶絶する自身とは裏腹に、 男根はギ

ンギンに大きくなってしまった。もはやテルの意地もプライドもズタズタだ。

容赦のない、ノリコの蹴りは続く。

「キッ・キッ・・キン・・・タマ・・・キンタマ・・があああ・・おつ・・俺の・・・

った。 いいかげんに、 ノリコが蹴り疲れた頃、 テルの股間からは大量の白い液が飛び出し、 意識を失

「さあ、さいごよ」

「ついにエミの番ね」

「がんばってエミ」

ヒデの巨体が、ノリコとサユリによって起こされ、 ずっしりとしたキンタマが、 エミに蹴られ

るために、晒された。

まずエミは、ヒデの頬を打って目を覚まさせた。

「・・あ・・う・・・」

「はぁい! お目覚め?」

「なっ、この女!」

勢いは良かったヒデだが、すぐに自分の置かれている状況を把握し、真っ青になった。

「なっ、なぁ、俺が悪かったよ。ただちょっと、 虫の居所が悪かっただけなんだ。カンベンして

くれ

女々しく命乞いをするヒデにエミは、 にっこりと微笑むと、ヒデのキンタマに蹴りを放つ。

「ぐごおおおっ!たっタマがああっ!」

「残念でした! 許してあげない」

目にもとまらない、エミの連続蹴りが、ヒデの股間を襲う。

「ぐげっ!・キッキン・・・ぐがぁっ・タッタマがっ・・ぐおぅぅっ・・タッタ マが 0

さっきの2人と違い、鋭く、 リズミカルな蹴りがにヒデのキンタマを襲う。

「そッそんな・・おっ女に負けるなんて・・・こんな筈じゃ・・・」

股間から内臓に響く鈍痛に、 ヒデの意識は薄れて行く。 朦朧とした意識の中で自分が女に負け

たと言う事実をようやく認識し始めた。

「こっ、こんな・・俺が、俺が、女なんかに・・・・」

やがて、盛大に精子をぶちまけながら、ヒデも気を失った。

しに晒していたために、3人のキンタマは真っ赤に日焼けし、 の男達は醜態を誰かに見られる前に、意識を取り戻したが、かなりの長い間、 エミたちは丁寧に3人を大の字に仰向けにして並べると笑いながら去っていった。幸い、3人 歩くことすら出来なかった。 しばらくの間、 股間を、夏の日差 下着はおろか、ま

#### 5 女王蜂

ていた。 平日の昼を少し過ぎたばかりの街は、 普段の賑わいからは想像もできないほどにひっそりとし

知美。 H高校の2年になる。 あるごとに苛められていた。特に何か因縁の様なものが有ったわけではない。 カートから時々のぞく膝には大きなすり傷があった。血は乾き始めているが、まだ新しい。大里 広い歩道を一人、近くの公立高校の制服を着た少女がうつむきかげんに歩いている。 高校1年の時にたちの悪い男子グループに目をつけられ、 紺色のス ずっと事

知美は良くみればなかなかの美人だ。だが、 影があった。 おそらくその影が苛められる原因なの

うかがうような彼らの視線は常に感じていた。 からかばってくれる友達もいる。彼女たちと一緒にいる時に苛められる事はあまり無いが、隙を そしれ ない。 幸い、女子からいじめられることは無く、 親友と呼べる友達もいる、 時には連中

健室に行き体温を測ると若干熱があった。 悪くなり始め、 その日は朝から体調がすぐれなかったが、4 終わる頃にはひどい頭痛に襲われていた。 時間目が始まったあたりから、 顔色の悪さを心配した先生の進めで保 だんだんと具合が

「風邪の引き始めかもしれないわね。薬をあげるから少し休んでなさい」

いかにも保健室のおばちゃんと言った感じの佐和子に薬を貰い横になる。 しばらくすると、

「どう?いくらかは楽になった?」

「今日は早退したほうが良いわね。薬が効いているうちに帰りなさい。」「はい、ずいぶん楽になりました。」

知美は素直に従った。

校門に差し掛かった所で連中が向こうからやって来るのが見えた。い 一番背の高いのがバスケ部の村瀬。 村瀬ほどではないが背が高く、 がっちりしているラグビー つも4人でつるんでいる。

田だ。 部の高田 一見細身だがよく締まった体をしているボクシング部の木原、 そしてリーダ 格の

そうだ。どうやら、仲良く昼出勤のようだ。 発達した筋肉を持っていた。身長に合わせて作ったガクランはぴちぴちで、 ある村瀬の隣にいると大人と子供ほどの差があった。だが、 170を優に超す3人の中で、 1 6 2 3しかない桜田は余計に小さく見えた。 体操部の桜田は4人の中でもっとも 胸の部分などは弾け 特 に 1 8 Ō

しまった、と思ったが、逃げるには遅すぎた。

「お~や、知美ちゃんじゃ~ん。こんな時間に学校抜け出すな 自分の事は棚に上げて、 坊主頭の高田が言う。 お調子者で4人の中では常にボケ役だ。 んて、 V っけないんだ~」

「よせよ、タカ。 知美ちゃんは俺らを出迎えに来てくれたんだぜ。 なぁ知美ちゃん?」

それでも彼に告白する乙女は後を立たない。 いを寄せる女子は少なくない。だが、彼に告白した女子は必ず泣かされると、もっぱらの噂だ。 高田の肩に手を掛けながら長めの髪を無造作に立てた村瀬が言った。 背が高く、 男前の彼に思

「おおっ、そりゃ~うれしいねぇ。てっきり嫌われちゃってると思ってたよ?」

に似ている。 そう言いながら、 知美は苛められながらも木原を見るたびにそう思う。 短く刈った髪と長いモミ上げを茶色く染めた木原は知美の後ろへ回った。

「っていうか、単なるMじゃね~の?」

- 54 -

げを長くし、髪を立てているのはどうやら妻夫木を意識しているらしい。 両手をポケットに突っ込んだまま、桜田は下から上までなめるように見ながら言った。 もみ上

らだ、 にくっ付いているだけにすぎない。そして、 桜田は知美よりも背が低い。4人の中で知美を苛めたがっているのは、 と知美は思う。 桜田が彼女を狙うのは、 彼女が桜田より背が高いか 桜田だ。 外 の 3 人は

知美は下を向いたまま、無言で高田と桜田の間を抜けようとした。

「しかとかよ?」

桜田に足をひっかけられ知美は転んでしまった。

転んだ瞬間にスカートが少しめくれたらしい。 木原がすかさず突っ込んだ。

おおっ?今日はピンクかぁ?」

その時、

「あんた達! なにやってんの!」

保健室で佐和子が見ていたらしい。

「やべっ! ばばぁだ!」

桜田達はいっせいに逃げ出した。

知美は立ち上がると、保健室の佐和子に頭を下げ鞄を拾って歩き出した。

知美の白い膝からは血が流れていた。

一痛つ!」

の目から涙が溢れる。 ていたが、まだ少し血が出ている。 学校から少し離れると緊張が解けたせい 痛みと共に恐怖も戻ってきた。 か、 膝の擦り傷が痛み出した。傷口はもう固まりかけ 恐怖は悲しみに変わり、 知美

「くやしい・・・なんで・・・。男なんか・・・男なんか・・・・」

美の涙は街の大通りに出る頃には乾いてい 持っていたハンカチで膝の 血を上から押さえる様に軽く拭き取り、 た。 また歩き出す。 芯の 強い 知

大通りを抜ける頃になって、 余計な体力を消耗したせいか体調が悪くなってきた。

何処かで休もう・・・。」

近くに無人の神社がるのを思い出した。 神社の階段に腰をかけ、 手すりにもたれ掛った。 周りを林に囲われた神社は人気もなく静まり返ってい

少し目を瞑ると体力が戻ってくるようだ。 春風が林を抜け、 知美の長い髪を揺らす。

「みっけた~!」

聞き覚えのある声に知美ははっと目を覚ました。

気がつくと目の前には例の4人組がイヤな笑顔で立っていた。

眠ってしまっていた様で、 4人が近づくのにまったく気がつかなかった。

ではない。状況は最悪だ。 知美は青ざめた、人気の無い所を選んでしまった自分の愚かさを悔いたが、 事態が良くなる訳

怖で体がまったく言うことを利かなくなっていた。 くりと彼女のほうへ近づいて来る。 彼女を見つめる4人の目は何時もとは違っていた。 体が動かない。 逃げなければならないのに、 オスの目だ。 目をぎらつかせながら、 極度の緊張と恐

とって最悪の末路が描き出される。 大きく見開かれた彼女の瞳に写る4人の姿が徐々に大きくなって行く。 知美の頭の中に彼女に

「誰か、誰か助けて・・・」

微かだった。

精一杯叫んだつもりだったが、 恐怖に首を絞められた彼女の声は春風にも飛ばされそうなほど

らに人目に付きにくい神社の裏側へ運ばれていく。そんな自分を彼女は不思議と他人事のように が後ろから彼女の口を押さえ、 何がなんだか分からなかった。 誰かが彼女の両足を持ち上げ、 誰かが彼女の腕を乱暴に引き、 誰かに体を胸の所で抱えられ、 彼女を無理やり立たせた。誰か さ

思っていた。

「よし、降ろせ。」

自分のベルトを外そうと躍起になっていた。 知美は草の上に降ろされた。目の前には桜田がいた。 桜田も緊張しているのだろう、 仁王立ちで彼女を見下ろしている。手は なかなかバックルを

外すことが出来ないでいた。

「はやくしろよ!誰か来ちまうぜ!」

カチャッ

「うつせえつ!

わかってるよ!」

ようやく外れたようだ。知美の口の中はカラカラに乾いていた

何で・・・私ばっかり・・・」

涙が溢れて来た。桜田が彼女に覆いかぶさった。 全員が彼女をぎらついた目で凝視している。

ボスッ! そして、 すぐに苦悶の表情へと変わった。 と言う音の後、目の前まで迫っていた桜田が、 何かに驚いたように大きく目を見開

「あっ・・・がっ・・・っ!」

喉に何かが詰まったような悲鳴だった。 実際、 知美は桜田が何かを詰まらせたのかと思った。

だが、 来た。 桜田は両手を喉ではなく股間に持っていくと、 そのまま彼女の胸に顔を埋める様に倒れて

誰?

った。 顔は幅の広い鉢巻のようなマスクで隠している。服装とは対照的な輝くような白い肌が印層的だ スリーブのシャツ、 彼女の目の前には女性が立っていた。体にぴったりとした、黒光りのするショ 肘まで覆っている手袋のようなものと先の尖ったロングブーツ。そして、 トパンツとノ

桜田をのぞく3は、 突然現れた非現実的な雰囲気を持つこの女を凝視していた。

「うぅぅっ、たっ、玉が・・・」

どうやらこの女ががら空きの桜田の股間を後ろから蹴り上げたらしい。

いことがあるのよ? 「童貞の坊ちゃんたちが必死になるのも分かるけど、世の中にはやっていい事とやっち 特に女性を力で何とかしようなんて獣には、 おしおきが必要ね」 け

3人はあっけにとられ、口を開けたまま、ぽかんとしていた。

「よっ、よくも俺のキンタマをっ!」

知美の胸に顔を埋めていた桜田が起き上がる。怒りで顔が真っ赤だ。

それを見た3人も我に帰ったように立ち上がった。 桜田の怒りが伝染したのだろうか、 さっき

の呆けた顔から一転、体中から殺気を放っていた。

「あら? やる気まんまんね?いいわ、 お姉さんが女性に対する礼儀って物を教えてあげる」

「うるせぇっ! やっちまえっ!」

桜田が怒鳴った。

村瀬は、長い腕を容赦なく女に向けて突き出しが、 女は流れるような動きで村瀬の ij チの 下

をくぐり、その股間に鋭い突きを打ち込んだ。

「ぐえつ」

ストレートが炸裂した。鼻血を撒き散らしながら、 村瀬が両手で股間を覆い、そのまま膝を着いた。 村瀬は背後に倒れ動かなくなった。 顔は苦痛に歪んでいる。その鼻 っ柱に女の

「言っておくけど、私のレッスンは厳しいわよ? ついてこられるかしら?」

猿の様なすばやさで女の背後に回った木原が後ろから女の首をスリー パー ホー ルドの要領で締

「あんま、なめんなよ!」

め上げた。

木原が勝ち誇ったように、歯を見せて笑った。

本当に猿に似ている。

「よぅし、放すなよ猿」

「猿ゆうなっ!」

どうやら仲間内でも猿呼ばわりされているようだ。

指をバキバキ鳴らしながら高田がゆっくりと女に近づく。

「いいながめじゃな~い。おいら、興奮しちゃうね」

高田は人差し指をゆっくりと女の胸の膨らみの真ん中辺りに沈めた。

「うおぉぉっ、やわらけ~っ!」

高田がはしゃぐのを桜田はニヤニヤしながら見ていた。

「ずり~ぞ! タカっ! 俺にもやらせろっ!」

「うっせっ!猿は黙って押さえてろよ!」

「だから、猿ゆうなっ!」

- 61 -

「でわ、もう一回・・・」

「ぐえっ!」

ドスッ

高田の股間に女の白い膝がめり込んでいた。

「あがああつ・・・つくうううつ・・・」

両手で股間を押さえたまま、

「おい タカッ!?・・・ついってえーってててっ・ ・・はつ離せえつ!

海老のように体を丸めた高田は地面を転げまわった。

女が後ろ手で木原の股間を握り締めている。

黒いガクランの股間を白い指がしっかりと捉えている。

「ああぁぁぁっ! はひぃぃぃぃっ!」

白い指が動くたびに、木原は情けない声を上げた。

たまらずに木原は女の首を離し、その手を自分の股間へやっ た。 何とか女の手を外そうとする

か、女の指はしっかりと彼の睾丸を捉え解くことが出来ない。

女は木原に向き直り、締め付ける指に更に力を込めた。

木原の顔は汗でびっしょり濡れていた。 歯を食いしばって耐えているその表情は、 ますます猿

きつく絞られた黒い布は中に収められた2つの玉の形を露にした。 を連想させる。やがて女は人差し指と親指で輪を作るようにして、木原の睾丸を根元から絞った。

「年の割には大きいんじゃない?」

逃げ場の無い木原の睾丸に、女は容赦のない膝蹴りを叩き込んだ。

木原の黒目が上瞼の中に消え、 白めを剥いてその場に崩れ落ちる。 手足が痙攣している。

体に張り付くようなTシャツは彼の発達した筋肉を引き立たせている。 と視線が合うとガクランを脱ぎ捨てて構えた。ガクランの下には黒いTシャツを着ていたらしい。 女は桜田を見る。 信じられない、 といった顔で倒れた仲間を見下ろしていた桜田だったが、女

「あら、男らしい体。喧嘩慣れしてるみたいだけど・・ ・・背が低いのね、 あなた?」

ることだった。 確かに女と桜田の身長は頭1つ分ぐらい違っていた。そしてそれは桜田がもっとも気にしてい

)

ーキスク!!!

桜田が前に出た。 何度もパンチを打つが、 女はことごとくよけて見せる。

「くそっ!」

れ違いざま、さっき外したまま、ブラブラしていた桜田のベルトのバックルを掴み引っ張った。 桜田が放った少し大振りなパンチを、彼の右側から背後に回るような動きでかわし、更に、す

シュッと言うかすかな音と共に、見事にベルトは桜田の腰から抜け、 女の手に移っていた。

「凄い・・・」

手品のような鮮やかさであった。 知美は目の前の出来事に見とれていた。

「ちきしょうっ!」

桜田が女に向き直った瞬間、ベルトを失ったズボンが落ちた。

「うふっ、生意気にフィットボクサーの下着なんか着てるのね」

桜田は体にピッタリとフィットした白のボクサートランクスを着けていた。

睾丸や亀頭の形がはっきりと分かるほど、フィットしているタイプだ。

「なっ?!

事態に気づいた桜田はあわててズボンを上げようとしたが、 女のつま先の方が一瞬早く下着越

しの彼の睾丸を捉えていた。

「ウゲッ・・・・!」

ズボンを膝の所まで上げた状態で、 桜田は硬直した。 その股間を更に容赦のない女の黒い . ブー

ツが襲う。

ドズンッ!

「グゥッ・・・」

桜田の体が一瞬浮き上がる。

ドズンッ!

「ヒッ・・・」

3発目の蹴りで桜田は膝を地に着けた。

「・・・たっ、タマが・・・・」

ゆっくりとスローモーションの様に顔から地面に突っ伏した。

女は、まだ地面を転げ回る高田の腰の辺りをつま先で蹴った。

「ぐあつ!」

腰をおさえ、のけぞった高田の股間を踏みつける。

「ひっ、ひっぃ

「さっき私の胸で遊んでくれた分よ。」

女は高田の股間を踏みつけたまま、彼の太い両足をそれぞれの腕で抱えた。

「知ってるかな?電気あんまよ。」

「やっ、やめてっ! ごっ、ごめんなさ~いっ!」

いつも、 にやけている高田には珍しく必死の表情だ。 それが知美には可笑しかった。

もう遅い

ゴッゴッゴゴゴゴ・・・・・・

「あああああつ・・・たっ、タマキンがあああっ!!」

- 65 -

そのスラリとした美脚からは想像も出来ないほどの力強い電気あんまだった。

まるで、 削岩機のようだ。

「ひいいいいいツ・・・・」

甲高い悲鳴を上げながら、必死にもがい ていた高田だったが、 しばらくすると動かなくなった。

女は動かなくなった高田の両足をはなし、 知美の方へと歩いてきた。

「大丈夫?」

とても優しい声で言った。

「はっ、

「そう、良かった、何かある前で。」

「有難うございました。あの・・・失礼かもしれないですけど、 強いんですね」

「ふふ、有難う。」

「私もあなたみたいに強かったら・・

知美は視線を落とした。

「大丈夫よ。 あなたも強くなれるわ。女である限りね」

知美が半信半疑の目で彼女を見上げた。

「本当よ。いらっしゃい、教えてあげるわ。この連中程度ならあなたでも十分に勝てる方法をね」

「さあ、練習台が一人必要ね。どれにする?あなたが選んで」

知美は迷わず桜田を指差した。

「ふふ、だと思ったわ。そうそう、私はエミ。 あなたは?」

知美です」

かわいい名前ね」

寄りかからせた。ひざの所で引っかかっていたズボンを脱がせ、それを猿轡がわりにした。 そう言いながら、抜き取った桜田のベルトで彼の両腕を後ろ手にしっかりと縛り、 神社の壁に

大事なのは、 まともにやったら、 勝てないって事。 力は男のほうが強いしね。まともに

れがあるの」 戦おうとすると、どうしても長い練習が必要になるわ。 でもね。 さっきも見てたと思うけど、

そう言って女は桜田の股間を足でついた。

おちんちんじゃないわ よ。睾丸。まぁ、俗に言うキンタマね。タマキンって言う人もいるけど」

知美は顔を赤らめた。

「キンタマ・・・・。」

小声で呟きながら、体の心が熱くなるのを感じていた。

「そう、ここが男の急所なのよ。男の象徴が最大の急所なんて、笑っちゃうわね」

知美はじっと桜田の股間にある2つのタマを見つめた。

られるわ」 「とにかく、 ここにヒットさせることが出来れば男はイチコロ プロレスラーだって悶絶させ

「そういえば・・・」

きまで物凄いキックやパンチを受けても戦い続けていた人が、たった一度のその膝蹴りだけで、 た屈強な男たちが世界一を決める為に戦う、 われていた選手が、 知美は前にテレビで見た光景を思い出した。たまたま付いていたテレビで、世界中から集まっ 相手の膝を股間にもらってしまい、 と言う番組がやっていた。その中で、優勝候補と言 リングの上をのた打ち回っていた。さっ

戦い続ける事が出来なくなり、 両脇を支えられたままロッカー へと運ばれていったのだ。

「あの時も・・・」

「さぁ、練習してみましょう」

「はっ、はいっ!」

ゴッ!

知美は桜田の睾丸をつま先でけった。当たる瞬間、なにかコリッとした感触をつま先に感じた。

「うううつ!!」

猿轡越しに桜田がうめいた。

「楽しい・・・・」

苦悶にゆがむ桜田を見てそう思った。

2発、3発。知美がけるたびに桜田が許しを請うように知美を見た。

「私は今まで何度、そんな哀れを請うような目であなたを見たのかしら・

何十発蹴っただろうか、桜田はもう焦点が合っていなかった。 知美は肩で息をしていたが、

れは感じなかった。

「もっと蹴りたい・・・。」

そう思った。そんな知美の胸中を察したのか、女は言った。

「こいつはもう無理ね。これ以上やったら潰れてしまうわ、 もっと蹴りたいのなら、 他の奴にし

ましょう」

「はいっ」

結局、知美は全員の股間を何十発かづつ、泡を吹くまで蹴り続けた。

男達の苦悶の呻き声に包まれ、知美の顔は充実感に満ち溢れている。

頬を赤く上気させたその顔からは、かつての影の様なものは消えていた。

数日後

お茶買って来ましたっ!」

ゼイゼイと肩で息をしながら桜田は、買ってきたばかりのお茶を差し出した。

「おそいっ!! 30 秒で買って来いっていったでしょうっ!!」

「そっ、そんな・・・」

おびえた目をした桜田の股間を容赦なく蹴り上げる。

「ぐえつ!」

「ひでえ・・・」

思わず木原が呟いた。

「はひぃっ!」

「なんか言った?猿?」

少女の手がしっかりと木原の股間を捻り上げていた。

「いっ、いえっ!言ってません!何も言ってません!」

「村瀬! うざい! 少しちぢめ!」

「はいっ!」

村瀬があわててしゃがむ。

「へっ?! えっ? あ~、え~・

「高田、笑わせて」

困る高田。

「面白くな~いっ!」

ゴキンッ

高田の股間に知美の膝が突き刺さる。

「はうっ!」

「高田、飛べ」

「は、はい~っ」

股間を押さえ前屈みのまま、高田はぴょんぴょんと跳びはねる。

「はいっ!」 「桜だ! あんたも飛びな!」

二人とも必死の形相をしている。高田の隣で桜田も痛む股間を押さえたまま飛んだ。

った。かつては、自分を苛めていた男達を、奴隷の様に扱き使う知美の姿は、さながら女王蜂の様だかつては、自分を苛めていた男達を、奴隷の様に扱き使う知美の姿は、さながら女王蜂の様だそんな二人を見て知美が声を上げて笑う。